

## 第二章

第一章は、「社会主義を科学にするためには、まずそれが実在的な基盤の上にすえられなければならないかった」という文章で結ばれた。その「実在的な基盤」をつかむには、世界を「科学の目」でとらえる科学的な世界観が必要である。

第二章は、その科学的な世界観の全体を短い文章で説明した章。説明の順序は弁証法―唯物論―史的唯物論―経済学と、たいへん独特な組み立てである。

〔A〕まず、弁証法という考え方を形而上学的な考え方と対置させ、古代ギリシアから説き起して歴史的に解明する（段落1〜7）。

1. 思考形式の二つの流れ。弁証法的思考と形而上学的思考（47〜48ページ）
2. 古代ギリシア哲学の世界観。連関と運動。その後における形而上学な考え方の誕生。それは、自然科学の発展段階の歴史的特徴と結びついていた（48〜50ページ）
3. 形而上学的な見方のいくつかの特質（50〜52ページ）
- 4〜5. 弁証法的な見方。自然科学の発展との関連（52〜54ページ）。
- 6〜7. ヘーゲルの哲学とその矛盾。（54〜56ページ）
8. その弁証法は、唯物論の立場に立つてこそその真価を発揮できる（56〜58ページ）。

〔B〕エンゲルスはつづいて、社会の近代的発展のなかで、歴史観においても、観念論的歴史観から唯物論的歴史観への決定的な転回が起ったことを指摘する（段落9〜10）。

〔ここは、第二課で学習した史的唯物論の復習として読むこと〕。

〔C〕唯物論的歴史観に立てば、社会主義は、もはやあれこれの天才的頭脳による発見などではなく、二つの階級（プロレタリアートとブルジョアジー）の闘争の必然的な産物としてあらわれる。その立場で社会主義運動の前に提起される課題は、資本主義的生産様式の内的な性格を科学的につかみ、そこからこの体制が歴史的に発生・発展する必然性と同時に、将来的には没落の必然性を持っていることを証明する、という問題だった。マルクスは、剰余価値の発見を基礎にこの課題をやり遂げた（段落11）。

〔ここは、第一課で学習した搾取論・剰余価値論および資本主義論の復習として読む〕。

〔D〕エンゲルスは、科学的な世界観についての包括的な説明を、マルクスの二つの偉大な発見、「唯物論的歴史観と剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露」によって、社会主義は科学となった、という文章で結んでいる（段落12）。

この立場に立って、資本主義的生産の発展と没落、そして社会主義社会への変革の必然性を研究し、社会主義のもとでの人間社会の躍進的発展の未来展望を明らかにすることが、第三章の主題となる。